

# 「佐賀果試 35 号」幼木の時期のかいよう病対策について

果樹試験場 近藤知弥

佐賀県果樹試験場で育成されたカンキツの新品種「佐賀果試 35 号」は、本誌 2020 年 3 月号、4 月号で紹介されたように、食味が極めて良好であることに加え、長期貯蔵が可能な特性を有する期待の品種です。佐賀果試 35 号（以下、35 号）の産地への普及は、平成 29 年度の無加温ハウス栽培のモデル園地を皮切りに、本年度から露地栽培でのモデル園地も始まりました。ただ、これまでの 35 号の露地栽培の試験結果から、かいよう病に対して罹病性があることが確認されており、施設と違い風雨にさらされる露地の場合、特に本病に対する十分な対策が必要となります。幼木の時期にきちんと防除対策を行い、発生を防ぐことができれば、後々の防除を楽にすることができます。

そこで、今回は露地栽培における 35 号の病虫害防除について、果実生産を行う前の幼木の時期を対象に説明します。表 1 は発生・被害が問題となりそうな病虫害の防除体系を示しています。病害は「かいよう病」、害虫については枝葉を加害するミカンハモグリガ等を中心に記しています。注意事項も併記していますので、ご確認ください。

## 1. 植栽時の注意点

- ①植栽する園地は、これまでかいよう病の発生がなかった～極めて少なかった園地を選びます。特に、35 号は温州ミカンより本病に弱いので、温州ミカンで発生がみられた園地は避けます。
- ②枝葉に風傷が多く発生するとかいよう病が発生しやすくなるので、風当たりの強い園地での植栽は避けます。その園地しかない場合は、しっかりとした防風対策（防風網の設置等）を行います。
- ③苗木に発病がみられた場合は、発病葉・枝を必ず除去します。特に発病枝は長期間伝染源となるので、切除できない部位に発生している病斑は削ってでも取り除きます。
- ④苗木は支柱を立ててしっかりと固定します。風傷の抑制につながり、かいよう病対策としても効果があります。

## 2. かいよう病防除

- ①病害防除はかいよう病対策を中心に行います。この時期は結実させないため新梢の発生が盛んとなり、本病に感染する機会が増加するため、定期的な防除が必要となります。
- ②防除には IC ボルドー66D 60 倍または IC ボルドー412 50 倍を主に使用し、散布約 30 日後または累積降雨量 150～200 mmを次回散布の目安とします。
- ③IC ボルドーは、2～3 月の発芽前の防除では単剤で使用します。4 月以降の防除の際は、新芽への石灰による薬害を軽減するためにアビオン E 1,000 倍を必ず加用します。

- ④秋季の気温が高く推移し、強風雨や台風の襲来等があると、11月頃まで感染・発病します。新梢の発生に応じて、10月～11月まで防除を行う場合もあるので、秋季の気象、新梢の発生状況に注意してください。
- ⑤表1に示すように、ICボルドー剤の散布間隔は約1か月です。しかし、新梢の発生が旺盛な時期になると、薬剤散布後に伸長した枝葉には薬液が付着していないため、この部位はかいよう病やミカンハモグリガの被害を受けやすくなります。そこで、新梢の発生状況に合わせて、次回のICボルドー剤散布前にクレフノン200倍を加用したコサイド3000(1,000倍)を散布します。本剤はICボルドー剤と比較して効果はやや劣りますが、他の殺虫剤との混用事例も多く、使いやすい薬剤です。
- ⑥生育期においても発病葉・枝は見つけ次第早急に取り除きましょう。

### 3. 害虫防除

- ①ミカンハモグリガの被害痕は、かいよう病の侵入口となるので、本虫の被害防止は本病の防除対策としても重要です。先述⑤のように基幹防除以外に新梢の発生状況に応じて、ミカンハモグリガの防除を臨機に加える必要があります。
- ②同じく枝葉害虫として、カイガラムシ類、ゴマダラカミキリ、アゲハ類およびアブラムシ類も重要な防除対象です。表1には各害虫の発生が問題となりそうな時期を想定して防除時期を設定しています。しかし、各害虫の発生は地域・園地によって異なると考えられますので、園地をよく観察して、防除をしましょう。なお、ゴマダラカミキリやアゲハ類については捕殺することも大切です。
- ③幼木の時期におけるミカンハダニは、防除対象としての重要度は高くないため、殺ダニ剤を使う必要性は低いと思われます。そこで、マシン油乳剤の利用が考えられますが、ICボルドー剤の効果はマシン油乳剤との混用または近接散布によって低下します。そのため、各剤の散布間隔は20日以上あける必要がある等、使用しにくいのが現状です。そこで、春季以降の発生を抑制して防除の必要性を極力低くするために、冬季にマシン油剤を散布します。

幼木にかいよう病が多発生すると早期落葉を引き起こし、樹冠の拡大が抑制されます。スムーズな樹冠の拡大を図るためにも、幼木の時期からかいよう病対策に取り組みましょう。

表1 露地栽培の佐賀果試35号未結実樹における病害虫防除体系

月	旬	殺菌剤	殺虫剤	その他
1月				[かいよう病] ●罹病部位の除去 ・罹病枝は必須
2月	下旬	●発芽前:発芽状況を要観察 ICボルドー66D 60倍または ICボルドー412 50倍		●防風対策の徹底 ・防風樹の管理 ・防風ネットの設置 ・肥料袋等を利用した幼木のおんどん栽培
3月	上旬			●風傷等が生じないように枝葉は支柱等で適宜支える。
4月	中旬	展葉初期 ICボルドー66D 60倍または ICボルドー412 50倍 加用アピオンE 1,000倍		[虫害] ●ミカンハモグリガの防除を徹底する。また、ハマキムシ類の発生も多いので同様に防除する。
	下旬			●アゲハ類やゴマダラカミキリを見かけた場合は必ず捕殺する。
5月	中下旬	同上	ハチハチフロアブル 1,000倍	●カイガラムシ対策の徹底(6月中旬頃) ●ハチハチフロアブルはボルドーより先に溶かす(薬液凝縮の防止)
6月	上旬	同上	モスピラン顆粒水溶剤 2,000倍	[かいよう病] ●ボルドー剤の次回散布の目安は、散布後の累積降雨量が150~200mmに達した時点とする。ただし、同降雨量に達していない場合でも、散布後30日を経過する場合は散布する。
	中旬		アブロード水和剤 1,000倍	
7月	上旬	同上	ダントツ水溶剤 2,000倍	●台風襲来後の防除は効果が期待できないため、台風の襲来(強風雨)が予想され、目安の降雨量を超える恐れがあれば、必ず事前(1~7日前)に散布する。
8月	上旬	同上	エクシレルSE 5,000倍	●夏~秋季は、新梢の発生が旺盛な時期である。そのため、薬剤散布後に枝葉が伸長して、薬液が付着しにくい部位が発生しやすく、このような部位が罹病する可能性がある。そこで、台風襲来前は、必ず生育状況を観察して、防除要否を判断する。
9月	上旬	同上		
10月	上旬	同上(臨機防除)		
11月	上旬	同上(臨機防除)		
12月			97%マシム油乳剤	